

探究を通じた高大接続の課題

～高大連携により、ともにAPに合う学生の育成を

旧課程の「総合的な学習の時間」は、社会課題について調べて発表して共有するという色合いが強かったのですが、新課程の「総合的な探究の時間」は、生徒自身のキャリアと社会課題とをからめて考えるものとされています。何をしたいのかを探究を通じて考えさせ、進路指導に使う高校も増えてきています。高校で探究が活発になれば、年内入試を希望する受験生がさらに増えるでしょう。しかし、すでに現段階でも、年内入試受験生の増加で、APを読み込み、生徒の長所を客観的に引き出す指導まで手が回らなくなっています。そもそも年内入試の受験指導は教員の経験頼みの面があり、個人ごとに差があります。加えて、生徒の志望理由書などの出願書類のアウトプットのレベルがまちまちで、その指導に時間を取られているといった問題もあるようです。

大学側はどうでしょうか。大学は、年内入試の受験者に「明確な志望動機」を求め、高校もそれを重視する一方で【図表9】、実際の選抜で大学が最も重視する項目は「面接・グループディスカッション」で、「志望理由」は、学校推薦型で4%、総合型で9%に過ぎないという調査結果があります【図表10】。「志望理由は大事だが、見極める方法は面接」であれば、大きな負荷がかかる志望理由書は課さなくてもよいのではないかと感じてしまいます。

ベネッセ文教総研 所長

西島 一博

にしじまかずひろ●(株)ベネッセコーポレーションで、小・中・高校対象の教材開発に携わる。2016年度より(株)ラーンスの代表取締役社長を務め、2021年度より現職。



このギャップを埋めるため、まず入試の面で考えられるのは、年内入試の評価基準の明確化です。桜美林大学の探究入試Spiralのように、評価基準をループリックとして公開することは、高校教員からの信頼につながるでしょう。また、APを高校生に理解しやすい形にすれば、年内入試の準備が容易になるだけでなく、生徒本人の目標とこれからの成長に向けた指標になるはずです。なお、共通テストの出題が探究的なものになっていっていますので、各大学の個別学力検査でも探究の力を測るようになれば、高校での探究学習をより一層促すことでしょうか。教育の面では、高校に教員や学生を派遣するだけでなく、高校生が大学に来るイベントを開催するのよいと思います。探究プログラムの提供は、自学の教育研究やAPを体感してもらう機会にもなります。

最近、地元の高校生対象の探究発表会を開く大学が増えてきています。生徒にとっては目標になり、他流試合で刺激を受けることができます。それが後輩にも受け継がれれば、文化としてその高校に探究学習が根付きます。もし、こうした発表会が開催されていないエリアであれば、実施してはいかがでしょうか。